第37回
イスファハン／イラン
Isfana Iran

世界を二分する最前線

リクルート=スタディサプリ講師　村山 秀太郎

革命の11年後に

1990年、イスタンブールからテヘランへ向かう深夜のトルコ航空。隣の席の20歳くらいのイラン人女性が、漢字ひらがなカタカナが混在する縦書きの文庫本に関心を示してきた。ひとしきりおしゃべりした後、私は眠りに落ち、眠りから覚めるとテヘラン空港への最終アプローチとなった。女性は、バッグから布を出し、しっかりと髪の毛を隠した。サヨナラをしてイランの入国審査の列に並ぶと、偶然にも隣の列の同じ順番待ちが先ほどの女性。が、話しかけると見事なまでに無視された。“空気”を読んでのことだったのだろう。

早朝4時の空港タクシー内でのホテル探し。シェラトンよりbiggerだと言うドライバーに従いヒルトンホテルへ行くと、名称はペルシア語で「独立」を意味するEsteghlalに。ルームキーには“Hilton”と記されていた。米国べったりで“退廃”した王制が打倒されたイラン・イスラーム革命の11年後の話だ。翌朝、ホテル内のショップに行くと、陳列棚には洗面用具や文房具そしてコーランらしき書籍など、生活必需品のみ。Islamic Republic of IRAN、まさにイラン的なイスラーム共和国への基礎固めの時期だった。

医者志望の21歳の女性と街角でおしゃべりした。私から話しかけたわけではない。“意識高い系”の女性はどんどん話しかけてくる。彼女は話が進むにしたがい、額の上まで隠していたヒジャブを徐々に頭のてっぺんまで上げていき、髪を半分くらい出してはまた戻すという奇妙な動作を繰り返した。「そんなことやって危なくない？」と言うと「いいの、いいの」と笑う。2022年に22歳のテヘランの女性が服装を監視する警察に拘束され急死した事件があった。これをきっかけに大規模デモが起き、その流れか24年に保守派のライシ大統領のヘリコプター事故死の際、国民は冷ややかな反応だったと報道された。

国際都市として繁栄

タクシーでテヘランから聖地コムを経てイスファハンへ南下する。イラン高原のアジアハイウェイは、中央分離帯のない片道一車線。そこを時速120キロで飛ばし、追い越しをかけ、対向車をよけつつ滑り込むのだから、眼前に展開するのはまるでゲームセンターの画面だ。「お